

『スペイン貴族は甘いのが好き』

著: 妃川 螢

ill: 実相寺紫子

「きゃあっ」と、少し離れた場所から、若い女性の悲鳴が鼓膜に届いた。だが、悲痛なものではなく、どこかピンク色に染まった悲鳴だ。

それを遠のきそうになる意識下で聞きながら、自身を襲う状況を正しく把握しようと懸命に努める。

だが、背にまわされた腕が、後頭部に差し込まれた大きな手と地肌を擦る指が、布越しに感じる高い体温が、そして、口腔内を蠢く熱いものの存在が、それを阻んでいた。

「……んんっ、……っ、んっ」

何がどうなったのか。

宙也が腕を掴んでいる相手が何者であるのかを認識した次の瞬間には、この状況に陥っていたのだ。逞しい腕に抱き締められ熱烈な口づけに見舞われるという、出会い頭の交通事故のような状況に。しかも公衆の面前で、だ。

——こい…っ……っ。

薄く目を開けると、金色の眼差しとぶつかる。

そこに揺れる熱のこもった光を目にした途端、玲也の思考が沸騰した。

「——……っ」

ガッ！ と、物凄い音がして、この状況を遠巻きにうかがっていた通行人たちがぎょっと目を剥く気配。だが、そんなものには目もくれず、玲也は怒鳴っていた。

「何しやがるっ」

男の頬を力いっぱい殴りつけ、相手が怯んだ隙に腕の囲いから抜け出す。

「オスカー、おまえ、なんで……っ」

反射的に、記憶に刻まれた名前が口をついて出ていた。そのことに、自分自身が一番驚く。

一方、殴られた金髪の主は、まったく怯むことなく、微笑みとともにその腕を広げた。

「覚えていてくれたんだね、マイハニー」

洗練され尽くした所作とキザも通り越して薄ら寒いセリフに、ゾワッと背筋が粟立つ。鳥肌の立った腕を抱き締めつつ、玲也はジリッとあとずさった。

「だ、誰がハニーだっ」

眩いほどの金髪に、同じく金色の瞳。

褐色の肌に、着る者を選ぶだろうデザイン性の高いオーダースーツをまとった長身のハンサム。その生まれの高貴さを洗練された所作に滲ませながらも、軽薄な口説き文句を平然と口にしてみせる。

せっかくのノーブルさを台なしにしかねない言動の数々も、桁違いに派手な容貌の彼になら許される。そう万人を納得させてしまえるだけの魅力ある美丈夫が、夜の華やぎをまとった美青年に迫る図はなんとも背徳的かつ淫靡で、絵になる光景ではあるのだが、当事者はそんな呑気なことなど言っていられない。

再び抱きよせようと距離をつめてくる相手の金色の瞳を見据え、この場をどう切り抜けるかを考える。

あんぐりと口を開け、言葉もなく目の前で繰り広げられる光景を見つめる宙也と翔太、さらには野次馬の視線が全身に突き刺さったが、こちらはそれどころではない。

「こんなところで再会できるなんて、まさしく運命だ。君もそう思うだろう？」

「思うかつ」

「夢のような一夜を忘れたことはなかった。君の滑らかな肌も甘い声もそれから——」

「うわああっ！ 黙れ黙れ黙れ!!」

反射的に男の口を塞ごうと手を伸ばしてしまって、待ってましたとばかりに身体を拘束されてハタと我に返る。まさしく、飛んで火に入るなんとやら、だ。

「捕まえた」

言葉とともに、口を押さえようとした掌をペロリ。

「~~~~~っ、放せっ！」

胸を突き飛ばしたが、逞しい体軀はわずかに揺れただけ。だがその拍子に眩い金髪がふわりと揺れて、玲也は眦が熱くなるのを感じた。派手な美貌は、間近で見るとは心臓に悪すぎる。

そこへかけられる、陰のある、少年期特有の高い声。

「どういうこと？」

ハッと斜め下に意識を向けると、腕組みをした宙也が訝しげにふたりの顔をうかがっている。

言葉もなく睨み合うふたり——玲也が一方向的に睨んでいるのであって金髪の主は満面の笑みだったが——の膠着状態を、さすがに我慢も限界に達した弟の問いかけが破ったのだ。

「この人、誰？ 兄さんの知り合い？」

自分から声をかけたことなどすっかり棚上げして、いかにも胡散くさそうに金髪の美丈夫を見やる。それから頬に冷や汗を垂らしている兄の顔をうかがって、その腕をぐいっと自分に引きよせた。

子ども相手に張り合う気はないのか、思いがけずオスカーの腕の囲いが緩んで、拘束から解放される。だが、ホッと安堵などしていられなかった。宙也の視線が痛い。

「いや……その……、ス、スペインでちよつと……」

まさか、酒の勢いで男とイタしてしまったなんて、未成年の弟に告白できるはずもなく、玲也は言葉を濁す。

「スペイン？ 三田村さんの結婚式で行った？」

「そ……そーそー、そのときに——」

つい半年ほど前に海外で式を挙げたばかりの親友の名を出されてドキリとする間もなく、すぐ横からロクでもない言葉を挟まれそうになって、慌てて遮った。

「運命の出会いを果たした——」

「黙ってるよ！」

今度は間近に迫る顔を、掌全体で押し退ける。オスカーは、余裕の笑みでそれを受け止めた。それを横目で睨みつつ、まずは弟への対処を優先させる。

「バーでたまたま隣り合わせてさ、一緒に呑んだだけなんだ」

兄が口にする実に苦しい言い訳に、宙也は斜め下からの視線で返してきた。

「ふうん？」

大きな猫目が、「それだけ？」と尋ねている。容赦のない追及の視線に曝されて言葉失っていたら、玲也の拒絶などものともしない男に背後から肩を掴まれた。

「つれないね」

「おいっ」

その手をはたき落とすと、肉感的な唇に苦笑が刻まれる。細められた目に浮かぶ光に不穏なものを見たと思ったのは、玲也の思い違いではなかった。

「弟がいるとは聞いていたけれど、こんなに可愛い子だとはね。はじめまして、オスカー・ガルディオラ・デ・エルバスといいます。さっきの話はまだ有効？」

さりげなく自己紹介しつつ、オスカーは訝る眼差しを向ける宙也に笑みを向ける。そして、玲也がこの場に駆けつけた原因であるところの話題を混ぜっ返しはじめた。

ふたりに比べてかなり低い位置にある宙也の顔を覗き込み、手を差し伸べる。それを見た宙也が秀眉をよせた。

「いくら出せるの？」

「君みたいに可愛い子になら、いくらでも」

男の器を量ろうとする宙也と、玲也の意識を自分に向けさせるために、あえて宙也の悪戯にのろうとするオスカーと。絡んだ視線の中間地点で、バチッと何かが弾ける。だが玲也には、それがわからなかった。

「待てよっ、子どもの冗談にマジに返すなっ」

忘れ去りたい過ちをふいに掘り起こされた状況では、まだ未成年の弟の身の安全に気をまわすだけで精いっぱいだったのだ。

「冗談じゃないもん。僕、この人を買ってもらう」

「宙也！」

兄と、なんの因果か自分が声をかけてしまった派手な容貌の外国人との間にただならぬものを感じ取った宙也は、逆ギレしたかのようにオスカーの腕に両腕を絡める。

それを力尽くで引き剥がして、玲也は弟の身体をまるで猫の仔を差し出すかのように、祈るように両手を組んで事態を見守っていた弟の幼馴染みに引き渡した。

「翔太くん、宙也を連れて帰ってくれるか。これ、タクシー代」

「あ……は、はいっ」

ふたりとオスカーの間に立ち塞がり、ちょうど走ってきたタクシーを停めて、強引に乗せてしまう。

「兄さんっ」

非難の声が上がったが、無視した。どうせまた店に押しかけてくるのだろうから、そのときまでに言い訳を考えておけばいい。申し訳ないがしばらくの間メールはスルーだ。

「まっすぐ帰るんだぞ、いいな」

タクシードライバーに行き先を告げ、絶対に途中で降ろさないでくれと念押しして、ドアを閉める。

走り去る車を見送って、ホッと安堵の息をついたとき、忘れてはならない、何より一番の大問題である張本人が、背後から玲也の身体を拘束した。

「あーあ、可愛い子だったのに。逃げられちゃったな」

じゃあ、お兄ちゃんにかわりをしてもらおうかな、などと揶揄のこもった呟きが耳朶を

擦る。ゾワリと悪寒が背筋を駆け上ってくるのを感じて、玲也は今一度拳を振り上げた。

「性犯罪者になりたいのかっ」

だが、振り向きざまに放った一発は、易々と封じられ、目の前には眩い金色。

「……っ」

息を呑んだ瞬間に、抵抗を奪われた。

「搜したよ、玲也」

間近に紡がれる甘い声。じっと見据える金の瞳は揺るぎなく、その中心に自分を捉えている。

腰にまわされた力強い腕の感触と、全身に突き刺さる野次馬の視線。

玲也は片手で額を押さえ、諦めのため息をついた。

本文 p18～26 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>